

2026年4月19日(日)

老球の細道918

### 「努力」についての一考察

会津バスケットボール協会 室井 冨仁

米大リーグのシアトル・マリナーズの本拠地球場で4月10日、アジア人として初めて2025年に米野球殿堂入りしたイチロー氏(52)の銅像がお披露目された。バットを持つ右手を投手側にのばすおなじみのポーズ。イチロー氏は「人の心の中に残ってくれるものの証。いつの時代も思い出してもらえる」と感慨深げに話したという。

このニュースをテレビで見えていたら、銅像の除幕の際、バット部分が折れるハプニングがあった。イチロー氏が苦笑いしながら、殿堂入り投票で満票に1票足りなかったことに触れ、「常に僕には何か足りないという戒めのため、よかったと捉えることにする」と語り、現状に満足することなく、さらに高みを目指して努力する姿勢を周囲にアピールしていた。

2025年7月6日、米国ニューヨーク州クーパーズタウンで行われた野球殿堂入り式典においては、イチロー氏が感動的なスピーチを英語で行い、語った言葉は多くの人々の心を打った。その中で「若い世代へのメッセージ」として次のような話をした。

\*「夢は一夜で叶うものではない。小さな努力の積み重ねが大きな成果を生む」という教訓。

\*特に父親との練習の日々や、母親の支えを温かく回想。

イチロー氏もやはり「努力」の大切を強調している。才能があっても、なくても、スポーツでも、芸術でも、大きく飛躍するために最も基本的な要素は「努力」だと思う。ジョン・ウッデンの「成功のピラミッド」の礎石も「努力(勤勉)」で土台が組まれている。

女子マラソンでバルセロナ、アトランタと五輪2大会でメダルを獲得した有森裕子選手はマラソンを始めたきっかけを次のように語っている。

「走ることが好きになったのは、小学5、6年生のとき。大好きな陸上クラブ顧問の先生が褒めてくれたのがきっかけです。何も得意なものがなく、走るのも速くなかったのに、先生は、私の走ることに『頑張り』を褒めてくださったんですよ」

その後有森選手が出会った人物が、名将故小出義男監督だった。さらに語る。

「走ることが自分を表現する手段だった。私が必死に頑張れる、人より努力できるのがマラソン。そういうものを持てる自分が嬉しかった」

また、かつて大学アメフト界の王者、京都大学アメフト部は秀才の集まりながら、伝統的に強いチームだった。入部してくる1年生は勉強ばかりでスポーツなど苦手な子が多かった。アメフトなど未経験者がほとんどであるが、先輩たちがまずタックルを教える。タックルなど初めてやる動きで形などわからない。しかし思い切り突っ込むと、タックルを受けた先輩たちは上手にひっくり返る。ヤラセではあるが、やればできるという自信がつくという。

人に「やればできる」という自信を植え付けるには、このように大人たちの誉め言葉と「成功体験」である。それによって努力することを継続し、努力することが習慣になる。努力することを楽しみになった人間は必ず限界を打ち破る。